記事ID:K2020103100000000900

主体性回復への道

■首里城再建を考える■6■

頭部のノミ跡丸見えに

大龍柱、正殿の一部で核

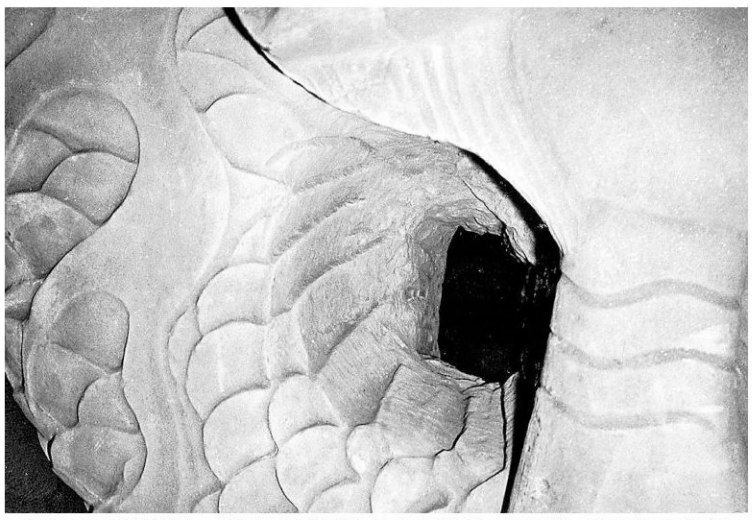
遺物が語る

當眞 嗣一

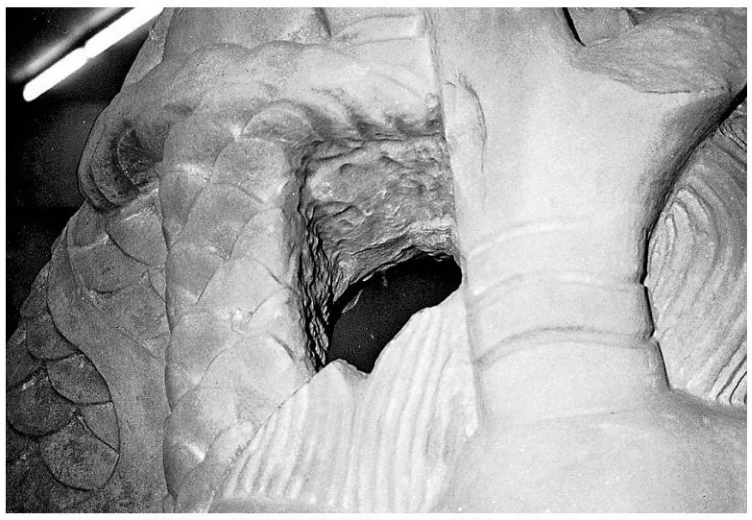
とうま・しいち 1944年西原町生まれ。琉球大学法文学部史学科卒。前原高校教諭、県教育庁文化課課長や県立博物館館長を歴任。前沖縄考古学会会長。グスク研究所主宰。グスク研究者の第一人者で首里城の遺構調査にも加わった。

首里城跡の復元建物8棟と収蔵・展示されていた400点近くの文化財が焼損してから間もなく1年を迎える。この惨事をきっかけに沖縄の歴史を見つめ直す機運が生じ、琉球の歴史や文化を再認識する動きも起きている。また、首里城への思いや再興を願う声に加え、首里城跡の地下深く眠る戦争遺跡の保存公開を訴える声も高まり、大龍柱の向きの問題も学問的な課題として取り上げられている。

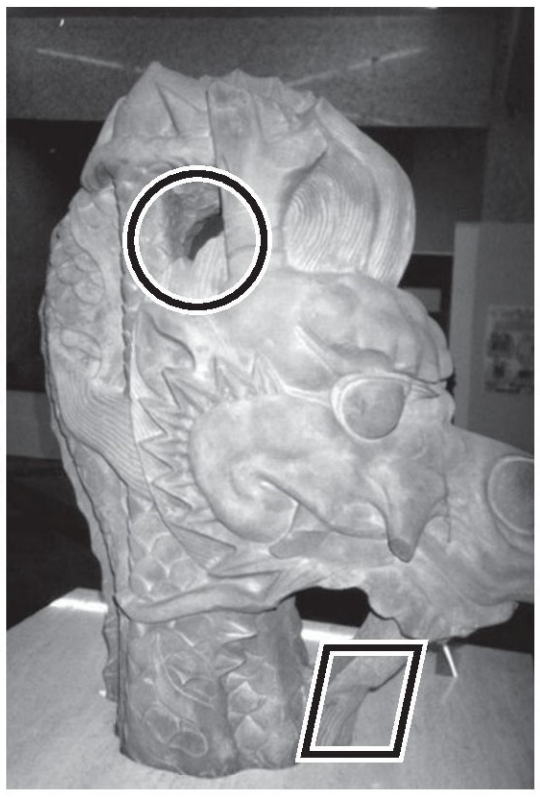
平成の復元でみごとによみがえった大龍柱。その原形となった阿形頭部（御庭から見て右＝南）の残欠が琉球大学博物館（風樹館）に、吽形頭部（御庭から見て左＝北）の一部が沖縄県立博物館・美術館にそれぞれ収蔵されている。二つの大龍柱の残欠は、かつては阿形・吽形の2体で一対をなし、正殿の前に立っていたが沖縄戦で破壊され頭部の一部だけが辛うじて遺ったものである。本稿では、両博物館に大切に保管されている遺物（モノ）を通して大龍柱の向きについて考えてみたい。



沖縄県立博物館・美術館が所蔵する大龍柱（吽形）の頭部の左半分。丸みの中側もウロコが丹念に彫られている（當眞嗣一氏提供）



沖縄県立博物館・美術館が所蔵する大龍柱（吽形）の頭部の右側半分。丸みの中側はノミ跡が残っている（當眞嗣一氏提供）



県立博物館・美術館所蔵の大龍柱（吽形）の頭部。頭部の丸みの中側（○）はノミ跡が見える。□の枠はあごひげで丁寧に彫られている（當眞嗣一氏提供）

ノミ跡が残る半分

琉球大学所蔵の阿形頭部残欠は、吽形に比べかなり小さくよほど注意深く見ないと大龍柱阿形頭部の破片だということに気づきにくい。頭部の丸味の中側（写真の○部分）を観察すると、右半分のウロコが丹念に表現され彫刻されている。その一方で左側半分ではノミ跡のまま放置され、ウロコの表現もない。

沖縄県立博物館・美術館に所蔵されている吽形頭部は、琉球大学所蔵のものより比較的残りが良く、頭部と胴部の一部がよくわかる。だが、不思議なことに顎髭外側のひげ（写真の□部分）が丹念に彫られリアルに表現されているのに対し、正面から見えない内側では、ノミの跡を残したままになっている。

また、頭部の丸味の中側（写真○）の左半分は腹のウロコを丹念に彫りきれいに処理されているが右半分ではノミの跡を残したまま放置されている。両龍柱の同じ部位を比較すると丹念に彫られた部分とノミ跡を残す部分が阿形と吽形では全く逆になっている。すなわち琉球大学資料の阿形では、右側が丹念に彫られ、県立博物館・美術館資料の吽形では逆に左側が丹念に彫られている。

正面向きの証拠

これらの事実から、一対の大龍柱が向き合う形をとると（平成の復元）、阿形・吽形ともにノミの跡を残した部分が御庭の正面に向くことになり御庭に集う人々からノミ跡が丸見えとなる。「手抜き」と疑われることまず間違いないであろう。逆に正面向きになると、阿形・吽形ともにノミ跡を残した部分が御庭の外側に向くため御庭に集う人々の目にとまることがない。

つまり、2体の龍柱とも頭部の丸味の中側は、丹念に仕上げた部分とノミ跡を残し放置された部分とに分かれるが、御庭から見える範囲だけを丹念に彫刻し、見えない範囲は「手抜き」の状態になっていたとみることができる。（できれば両博物館に足を運ばれて資料の見学を勧めたい）

以上、辛うじて遺された大龍柱の残欠は、首里城正殿前に立つ一対の大龍柱が正面を向いていたという一つの証拠となろう。

こま犬とは異なる

ところで偉大なる琉球の先人たちは、見えないところを意図的に「手抜き」したのであろうか。それが第二の疑問であるがその疑問を解くカギは、正殿と大龍柱との関係の中にあると考えられる。結論から先に言えば「手抜き」の意図はなかったということである。

かつて正殿の前に凛として立っていた大龍柱は、「龍御柱（りゅうぐすばしら）」と称されていたという（比嘉朝健）。つまり建物の一つのパーツとして、建物と一体化した姿で立っていたものであった。当時の人々からは正殿（国殿）の核となる構造物としての意味を持ち、琉球王国の誇りを象徴するものだったわけである。そういう意味において神社仏閣に鎮座するこま犬とは全く性格を異にするものであった。

そのことは古い木造建造物に見られた床の間の床の両脇に立つ床柱にたとえてみると理解しやすい。床柱は置物としての存在でなく、その家の由緒や誇り示すものであり、家の主人はその前で客と応対する。そのため床柱にふさわしい銘木を選び表面を磨き塗装する。

建物と一体化

だが客の目にとまらない床下や天井裏にあたるところは磨いたり塗装したりせず刃物の跡をそのまま残している。それと同様に見えない部分についてはあえて手を加えないという意識が大龍柱を製作した当時の石工たちの間にはあったと推測できる。つまり芸術作品を造るという意識で造られたものではない。あくまで正殿の構造物の一部としての認識のもと製作されたものだったのである。

大龍柱が建物と一体化されたものだということについては、すでに西村貞雄琉球大学名誉教授が数多くの大龍柱形態研究論文で論証指摘している。最近では、首里城から出土した欄干に伴う遺物群によってもそのことが実証されつつある。

首里城の再建は、私たち沖縄県民による琉球文化再生の絶好の機会であり、関係者や関係当局は広く県民の意見を聞き集約していく中で今後の再建を進めてほしい。

（随時掲載）

無断複製・転載を禁じます